

ゆっくり育つことの意味

2022.02 補足修正 後藤 忠

武者小路実篤

昔、新聞のコラムにこんな記事が載っていたのを思い出した。

「武者小路実篤は毎日毎日、書を書き、絵を描いたが、ついに上達しなかった。」

作家山口瞳は実篤の書画の腕前をこう評し、「だから好きだ」と書いている。

「私にとって『勉強すれば上達する』ということよりも、『いくら勉強しても上達しない人もいる』ということの方がはるかに勇気を与えてくれる」(山口)

実篤は生涯毎日、書と絵をかき続けた。実篤の人柄は、彼が好んで描いたカボチャやジャガイモの絵のように愚直で温かい。

「努力は報われるとは限らないさ。苦しい経験が実を結ばず、苦しいままのこともあってね…と人を慰めていると、いつしかわが身に語りかけているような気にならないでもない…」(山口)

実篤の若き日のノートには「デッサンは実にへたなり。勉強するつもり」と記され、晩年の色紙によく「**桃李三年 柿八年 だるま九年 俺は一生**」と書いた。

いわゆる「ゆとり教育」の出現と批判

平成13年(2001年)だったと思う、いわゆる「ゆとり教育」に対する激しいバッシングが巻き起こったのは。

平成10年告示の新学習指導要領に基づく教育課程が2年間の移行措置期間を終えて、いよいよ次の年(平成14年)の4月から完全学校週五日制の下で全面実施されるという直前になって、にわかにか

学人や政財界人、マスコミ等から噴出した**学力低下問題**への批判は非常に激しかった。

文科省は急遽「学びのすすめ」というアピールを出し、教育課程実施状況調査を行ったり、学習指導要領の一部改訂を行ったりしたが、それがまた混乱に拍車をかけた。

今でも「ゆとり教育」とか「ゆとり世代」などと揶揄され、嘲笑されている教育理念はそんなに酷(ひどい)ものだったのだろうか？

その教育は、平成元年告示の学習指導要領から始まったものである。(生活科が誕生した時の学習指導要領である。)

その頃(昭和の終わり頃)の我が国の**初等中等教育**に対する中教審や教課審の認識と評価は、「国際的評価は高い」とする一方で、「教師が教え、児童生徒がそれを受けるといふ伝達のシステムが教育の硬直化や画一化を生んでいるのではないか」、「(校内暴力や非行、いじめなどの問題行動や、学校不適応、学習障害等の児童生徒の増加に対してもっと児童生徒の個性を尊重し、一人一人の能力や適性等が伸長され、児童生徒の自己実現への意欲が喚起されるような教育へと質的転換を図る必要があるのではないか)」、「これまで行われてきた教育課程の改善は、どちらかといえば児童生徒が身に付けるべき知識や技能などの内容の改善に重点が置かれていたが、そのような改善の方向ではこれからの社会の急激な変化に対応できないのではないか」というもので、従来の学力育成の方

針であった「確かな基礎基本の（土台の）上に見事な個性の花が開く」という学力観から、「確かな基礎基本は個性とともに育つ」という学力観に変えていく、つまり、「少なく教えて、深く考えさせる学習指導への転換」を図ろうとするものであった。こうした学力の考え方を「新しい学力観」と称した。

学校は生涯学習の基礎を培うところという大前提に立ち、平成元年告示の学習指導要領第1章総則に、「学校の教育活動を進めるに当たっては、自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を図るとともに、基礎的・基本的な内容の指導を徹底し、個性を生かす教育の充実に努めなければならない」と謳った。

さらに、平成8年の中教審答申では「ゆとりの中で、生きる力の育成を図る」ことが提言され、平成10年改訂の新学習指導要領第1章総則に、「学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、児童生徒に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かし特色ある教育活動を展開する中で、自ら学び自ら考える力の育成を図るとともに、基礎的・基本的な内容の確実な定着を図り、個性を生かす教育の充実に努めなければならない」と示した。（総合的な学習の時間が新設された時である。）

その後、前述したように新学習指導要領の指導内容に対して激しいアンチテーゼとバッシングが巻き起こり、「学力低下問題」についての論争と混乱はしばらく続いた。しかし、学力低下問題の議論はいつも噛み合わなかった。

学力を「知識や技能の量としてとらえ

る立場」と、「学ぼうとする力、学ぶ力、学んで得た力などの総合的な力としてとらえる立場」とでは、噛み合わないのも当然といえる。

しかし、結果的に「新しい学力観」は世間には通じず、著しい学力低下を来すとして、あっさり潰されてしまった。

そして、「確かな学力」の育成、つまり元に戻ってしまった。

ゆっくり育つことの意味

無意味な「たれば論」だが、もしあの時の教育の流れが続いていたら、今日の日本の教育はもっと進化していたのではないかと思う。

日本社会は、経済の凋落とともに週休2日制が崩れ、また、学校で教える知識・技能の量と教育課題の増加によって、土曜日授業が当たり前のように復活している。（国際的には逆向きの流れのようで、フランスでは週休3日制が議論されているというが。）

いずれにしても、子供の学力は（道徳性も同じであるが）子供の学ぶ意欲と向上心に懸かっているのだから、「学ぶ楽しさが実感できる授業」、「分かる授業」、「面白い！ためになる！と思える授業」に磨きをかける他に道はないのだ。

人間、学ぶ意欲と向上心さえあれば、武者小路実篤のように、生涯にわたって持続可能な生きる力を自ら育てていく。

「ゆっくり育つ」ことの意味はそこにある。「子供を育てる」のではない、「子供は育つ」のだ。その認識に立つことが大事だと思う。

ゆっくり育ったものこそ確かなものだと私は思う。